

来住アフリカ人のコミュニティ形成と生活

清水 貴夫

文化人類学・宗教学・日本思想史専門 前期課程 2年

私の調査は来住アフリカ人コミュニティーを起点とした、相互扶助関係の人類学的調査です。

ますますグローバル化が進む昨今、最も新しいニューカマーである来住アフリカ人の数は年々増加しています。多くの場合、来住アフリカ人に対する一般社会の見方として、不法滞在や違法行為などネガティブな面ばかりが強調されています。このことは、しばしばニュースに挙げられるように、紛うことのない現実のひとつであることは言うまでもありません。来住アフリカ人の日本への移住の動機は、自国での貧困状況を脱するため、また、より豊かな生活の希求ということが多くのように思われます。しかしながら、現実的には日本での就業機会は非常に希少で、安定した生活を営み、来住アフリカ人が将来希望する方向に進むことができるのは希なケースのようです。こうした現実がアフリカ人の逸脱行為に繋がり、マスコミや社会から法的・社会的逸脱者としてラベリングされているというのが一般的な見方のようです。一方で、NGO等の市民社会は、アフリカ人を含めて、社会システムから疎外されている在日外国人を支援し、実情にあわない社会システムに対して警鐘を鳴らす活動を行っています。

ここに来住アフリカ人を取り巻くいくつかのアクターが出そろいました。それは、来住アフリカ人自身、NGO等の市民社会、そして一般的な意味での社会です。本研究への私の視点は、来住アフリカ人同士の閉じた社会関係と、市民社会を含めた日本社会との開いた社会関係を立体的に捉えていくことで、来住アフリカ人の社会的な生活環境を探ることにあります。そして、後述するように、来住アフリカ人は市民社会の支援を待つ絶対的弱者でも、必然的な社会的逸脱者でもなく、自助的な社会関係を構築していることを考察していくことが重要な課題のひとつだと考えています。これらの研究の資料に関しては、未だまとまったものではなく、一次資料から収集していく必要があります。よって、資料は本イニシアティブにあるようなフィールドワークによって収集されなければなりません。そして、これと合わせて都市という流動的な空間を中心

とするため、都市人類学的手法を取り入れていきます。

本研究に関するこれまでの調査は2005年5月から約1年半ほどの間に、約20回のフィールドワークによります。本プログラム開始後、2月には、池袋のアフリカ料理店や六本木のストリート調査など3度敢行し、これらの調査の資料収集・整理に当たっています。さらに、これまでの調査の成果をまとめ、調査報告書を各所に提出すべく、現在鋭意執筆に当たっております。

これまでの研究から、来住アフリカ人は他の在日外国人と同様にコミュニティーを作り、互いの生活、楽しみや困難の共有を目的とした、相互扶助的な関係性を築いていることが分かっています。また主たる調査地である六本木には、今や来住アフリカ人の姿は自然な姿として受け入れられているように感じられるほどになりましたが、アフリカ人という大きな人種の枠で捉えてもさほど意味がないことが分かりました。言い換えれば、六本木の周辺は、ナイジェリア人の殊にイボ、エドと言った民族のナワバリと呼べる場所であり、来住アフリカ人の入り交じる場所ではないということです。ナイジェリア人は国籍別の在日アフリカ人の中では、最も大きなグループで、最も経済活動の活発な六本木のような繁華街を牛耳ることは分かりましたが、一方でその他の来住アフリカ人はどこにいるのか、また、どのように日本での生活を立てているのか、ということが次の疑問として浮上します。

この疑問について、カメルーン人の例を挙げておこうと思います。カメルーン人のコミュニティーは茨城県と埼玉県、千葉県の境界の某所にある自動車整備工場を中心として形成されています。この工場のオーナーであるG氏はカメルーン北西部州のパメンダ出身で、日本-カメルーン間のみならず、隣接する中央アフリカ共和国を含めた大規模な貿易業で成功を収めた人物です。G氏が扱うのは自動車部品が中心で、コンテナに解体した事故車、スクラップを満載して輸送し、現地で友人が販売するという商形式をとっています。G氏の周囲には、G氏を頼って来日したパメンダの人が

とが数十人いるようです（他のインフォーマントに拠れば200人に近いという発言もありました）。G氏が給与を支払って雇用しているのは、ほんの数名に過ぎませんが、そこにいれば、食事と寝る場所には困らないということで、実質的に無給状態で労働に従事しているカメルーン人もかなりいるとのこと。彼らはその間に某かの仕事を探し、就業していきませんが、G氏を中心とするコミュニティは、故郷カメルーンを離れた彼らにとって唯一頼っていける場所にもなっているようです。

このようにして、六本木という華やかな繁華街で働くナイジェリア人と、自動車工場を中心としたカメルーン人の2つのコミュニティの事例を提示しました。しかし、来住アフリカ人を取り巻く社会環境はさらに複雑です。今後のフィールドワークで重要になる3つのアクターの社会関係を確認していきたいと思えます。

はじめに、在日各国アフリカ人協会です。現在までにガーナ、ウガンダなどいくつかの国を単位とするグループが形成されていることが確認できています。こうした在日各国アフリカ人協会は、大使館主導である場合、民間人主導である場合、民族別のグループなど、それぞれの状況に合わせた組織作りが行われています。在日各国アフリカ人協会の中には葬式講などの互助システムを備え、自助的な性質を帯びていることが多いようです。

次に、市民社会との繋がりです。既に在日外国人支

援を目的としたNGOは数十年の歴史を持っています。しかし、在日アフリカ人を対象とした活動は未だ殆ど見られません。現在、私自身が共同調査を行っている（特活）アフリカ日本協議会（AJF）は、来住アフリカ人のHIV/AIDS問題に着目し、啓発プロジェクトを開始しています。現代社会における市民社会はひとつの主要な社会アクターとして捉えねばならず、本調査でもその動きに着目していきたいと考えています。

最後に、さらにプライベートな関係性についても言及しておかなければなりません。現在の来住アフリカ人の男女構成を考えると、圧倒的に男性が多いことが他の在日外国人と異なる点であると思われます。結果、日本人女性との婚姻や交際は日常的に見られる現象です。現在、すでに結婚後のさまざまな問題が顕在化し始めており、こうしたジェンダーに関わる課題についても十分にまなざしを向けておく必要があると考えています。

以上、『来住アフリカ人のコミュニティ形成と生活』と題する本研究のこれまでの経過と今後の展望について述べました。未だこの領域の研究蓄積は少なく、さらに、ミクロな人間関係とマクロな経済・政治状況が入り乱れる現象は、簡単には捉え切れません。現在、来住アフリカ人の問題を理解するために必要なのは、民族誌的記述を積み重ねていくことです。すなわち、フィールドワークにより、多くの個人のストーリーを集積して、より微細な問題系統を縫い合わせていく作業が重要だと考えています。

平成22年度長野県諏訪大社御柱祭準備でのフィールドワーク

石川 俊介

文化人類学・宗教学・日本思想史専門 後期課程1年

長野県諏訪地方で行われる諏訪大社御柱祭（以下、御柱祭）は、6年毎、寅年と申年に行われる祭りである。長野県諏訪郡の諏訪大社氏子（一柱につき2,000人以上）が、御柱と呼ばれる樹齢200年前後の樅の大木を社まで曳行し、社の四隅に立てる。御柱祭は、1,200年以上の歴史をもち、一度の断絶もなく行われてきたと言われる。近年、御柱祭は、平成10年（1998）長野冬季オリンピック開会式で紹介されるなどしたことで、全国的に知られるようになり、平成16年（2004）

には約178万人の観光客を集めた。

報告者は、この諏訪大社御柱祭について、博士課程前期1年次より断続的にフィールドワークを行ってきた。その中で特に、平成16年（2004）度御柱祭について参与観察と聞き取り調査を行い、その成果をもとに修士論文を執筆した。また、断続的に諏訪地域で祭礼調査や資料収集を行ってきた。今後は、次回平成22年（2010）度御柱祭に向けた準備に関するフィールド調査に加え、さらに視野を広げ、多角的に現在の